



Roman Book

著者と合の
話しより
に検印止

昭和38年5月10日 第1刷発行
昭和38年10月15日 第2刷発行

げんじくろうさつそうき
源氏九郎颯爽記

著者 柴田錬三郎

発行者 野間省一

印刷所 株式会社 常磐印刷所
(加藤製本)

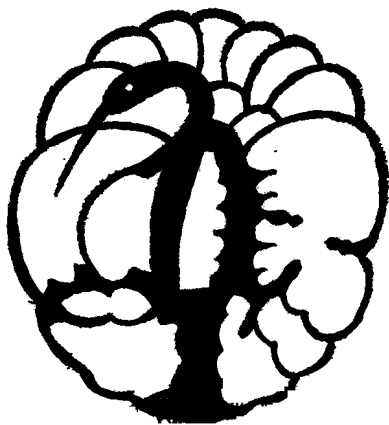
発行所 東京都文京区音羽町3ノ19
株式会社 講談社
電話東京(942) 1111 (大代表)
振替東京 3930

© 柴田錬三郎 一九六三

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

源氏九郎颯爽記

柴田鍊三郎



Roman Books

葵
嶺
御
正
伸

目次

血しぶき街道	一〇
月の三島宿	二四
秘劍揚羽蝶	三七
妖劍恋慕	五三
美女嵐	六六

女心乱心……………八〇

妖姫登場……………九七

星夜の血闘……………一〇七

狂乱の闇……………一二〇

悲運転々……………一三三

死を急ぐ人びと……………一四七

照る日かげる日……………一五七

源氏九郎颯爽記

血しぶき街道

一

箱根八里——小田原より箱根宿へ四里八町、箱根宿より三島まで三里二十八町。

東海道の旅人にとって、第一の難路であったことは、知らぬ人もあるまい。

秋の一日——。

くれない錦で飾られた美しい景色の街道を、いま、五十前後の一人の武士が、ひくく、漢武帝の詩を口ずさみながら、歩をすすめていた。

秋風起つて白雲飛び

草木黄落して雁は南に帰る

まさに、ここ——富士山の影をさかさに映した芦の湖を、右方に望む往還は、紅葉の屏風のうちにあるの観があった。

やがて、杉林の坂道にはいる。

鬱蒼として頭上をおおった樹枝をもれる陽光が幾条

もの火筋となつて、降りそそぎ——急に、世界は薄明になる。

箱根権現の神社の石段を、十歩のむこうに見たおりであつた。

とつぜん、その石段から、音もなく、すすつと駆け降りて来た三名の浪人者が、路上をふさいだ。

武士は、とつさに半身にかまえた。

おのれの行手をさえぎる邪魔者が、出現することは、あらかじめ、予知していたものごとくである。

その構えは、みごとな兵法者ぶりをしめして、みじんの隙もなかった。

「拙者を、大坪左源太と知つて、待ち伏せていたか？」
おちつきはらつた静かな口調でたずねたことである。

「いかにも——」

まん中の浪人者が、鋭い眼光を射込みつつ、うなずくや、さつと、刀を抜いた。

同時に、左右の浪人者も鞘走らせて、正確に、半間の距離をひらいて、大坪左源太を、半円に包むように、じりじりつと間をつめて来た。

「名乗らっしゃい！ 後のとむらいのために、きいておこう」

左源太は、鞘のくりがたに左手をかけたまま、言つた。

「後のとむらいは、こっちがすることだ。……おれは、仙藤鬼十郎」

まん中の浪人者が、傲然とこたえた。

あとの二人は、口をつぐんだままだ。それは、彼らが、仙藤鬼十郎の配下であることをしめしていた。

「何者にたのまれて、拙者を襲う？」

「言えぬ！」

「言えっ！」

「きいたところで、何になる。おぬしは、つぎの瞬間には、あの世に行つておるではないか——」

鬼十郎は、せせら笑つた。それが、かえつて、この男の風貌に凄味をくわえた。

左源太は、ふっと、背筋に寒氣をおぼえた。かつて、ないことである。

大坪左源太は、柳生流の達人であつた。むざむざ、素浪人ずれに、ひけをとる人物ではない。

にもかかわらず、この敵からあびた殺氣に、故知れぬ怖じ気めいたものを意識に掠めたのであつた。

——こんな剣鬼が、世にいたのか？

言葉に出せば、そのおどろきであつたろう。

「よし！」

左源太は、この意識をはらいすてるために、大きく声をはって言つた。

「みごと、拙者が背負うた火焰劍を奪うか？」

まさしく、左源太は、罽金色の布でつつんだ一刀を、背中につるしていたのである。

「奪うぞ！」

鬼十郎は、青眼につけた刀身を、やや高めに移すと、すっと、半歩を、きざんだ。

左源太は、ゆっくりと、一歩退いて、すらりと、白刃を、光らせて、これもまた、青眼につけた。

このおり——。

にわかに、頭上の木枝が鳴つて、さあっと、山嵐が吹きおろして来ると、左源太の袂をあおつて、鬼十郎ら三名の殺氣の形相へなびいた。

二

キキキキ……。

樹間をかすめて、二三匹の猿が、啼きすぎたほかは、おそろしい静寂は、しばしつづいた。

その静寂をやぶったのは、鬼十郎の配下の一人であつた。

「やああっ！」

怒号凄じく、切り込んだ。

左源太は、わずかに、右肩をねじっただけで、その胸を、ひら、と薙ぎはらって、つぎの瞬間には、もう、もとの構えに、もどっていた。

どさっ、と地ひびきたてたおれた浪人者は、もう、びくりとも動かなかつた。

すごい切れ味をみせたのである。

「うむっ！」

鬼十郎の顔面が、さらにいちだんと、懐槍の色をおびた。

のこりの配下が、

「おおっ！」

と、誘いに出た。

しかし、左源太は、乗らなかつた。

それから、また、しばしの沈黙の対峙があつた。

と――。

苛立った配下が、だだっ、と、大きく、左源太の左側へまわって、

「やっ！」

と、掛声もろとも、一刀をふりこんだ。

せつな――左源太のからだは、ひくく沈んだ。

閃光は、配下の顔へ飛び、ぱっと血しぶきを吹かせた。

鬼十郎は、左源太が立ちなおる隙をとらえて、

「とおっ！」

と、打って出た。

かっ！

はがねの噛み合う音とともに、火花が散った。

がっきとからんだ白刃と白刃が、木の間もる陽光に、きらきらと反射した。

だが、その睨みあいには、ほんの三秒とつづかなかつた。

「あっ！」

と、一声、はらわたを裂く叫びを発して、一間余、後方へとんだのは、左源太であった。

むざん——

その右眼には、一本の吹矢が、ぐさと突き立っていたのである。

この刹那を、鬼十郎が、のがすはずはなかった。いや、これは、あらかじめ打合わせてあった計略である
とみえた。

「えいっ！」

満身の気合をこめた、鬼十郎の豪剣が、びゅうと躍って、左源太の右肩へ、ぞんぶんに食い込んだ。

「うっ！ く、く、くそっ！」

くわっと、双眼から、血吹かせて、左源太は、死力の一刀を振ったが……。

鬼十郎のからだは、すでに、左側へとび移っていた。

かんまんに——上半身を崩し、そして、がくつと膝を折って、片手を地べたに突いた左源太は、
「む、むねん！」

と、悲痛な呻きをのこした。

どきっと、俯伏した左源太へ、氷のように冷やかな眼光をおとした鬼十郎は、のそりと、ふみ出して、その背にある包み刀へ、手をのばした。

すると——。

鬼十郎は、その手を、びっくりとめた。まだらの明暗の縞を織った路上に、ひとつの影法師が、すうっと延びて来たからであった。

ぎくっ、となって鬼十郎が、ふり仰ぐと——。

一間のむこうに、異風の姿が、湧き出たように、ひっそりと、たたずんでいた。

純白の羽二重の着流しで、紋は真紅の水おもだか、帯も純白で、刀も脇差も、白柄白鞘である。

あたかも、それは、青空にかかった一むらの白雲から生まれたような姿であった。真紅の紋だけが、舞い降りる時に、紅葉に染まったかとおぼしい。

深編笠をかぶっているの、顔はわからない。

「なんだ、貴様?！」

本能の敏速で、跳びすさった鬼十郎は、いま血ぬった一刀をさっとかまえた。

相手はこたえず、そつと身をかがめて、左源太を、のぞいた。

まるで、鬼十郎の存在を無視した態度である。しかも、その姿には、けわしい気色など、すこしもないのであった。

「あ——もう、たすからぬな」

と、深編笠の中で、つぶやいた。若々しい、澄んだ声音であった。

三

「貴様っ！ 何者だっ？」

鬼十郎が、重ねてわめくと、相手は、編笠ごしに、視線を送って、

「おぬし、卑怯者だな」と、言った。

「な、なにをほざくっ！」

「わたしは、立派な勝負と見うけたので、遠慮して、近づかずにした。ところが、おぬしは、伏兵を用意していて、吹矢を放たせたではないか。兵法者にあるまじき卑劣の振舞いだぞ」

「貴様も、吹矢をあびたいかっ！」

「さよう、あびてもいい」

笑ったようである。

「うぬっ！ 編笠をとれいっ！」

鬼十郎は、満面に朱を散らして、ほえた。

すると、相手は、おもむろに、あごの紐へ手をかけて解くと、ふわりと、編笠をはずした。

瞬間、鬼十郎は、

「うっ！」

と、唸って、大きく目を剝いた。

水もしたたる——その形容は、この異風の人物のためにつくられたかと思われる。白質典雅の美貌は、粧眉青く秀で、切長の双眸は湖底の神秘を映したように澄みきっていた。鼻梁の気品の高さ、赤い唇のかたちのよさ。貴人の相とは、これをいうのであろうか。

年は、まだ二十歳なかばにも達してはいまい。総髪を、うしろでたばね、白紙でむすんでいる。

鬼十郎が、狸狐の変化か、とわが目を疑ったのもむりはなかった。

この時、神社へのぼる石段の中途にあっても、青年

のあまりの美しさに、おどろきの声をあげた者があ
る。

こちらは、女であった。しかも、鉄火な稼業の者と
みえた。黒襟つきの黄格子の着物を、胸あらわに崩し
着て、片裾を帯にはさんで、水色の蹴出しをのぞかせ
ている。まなじりの鋭くきれあがった、凄艶といつて
もいい色年増であった。

右手に、一管の横笛のようなものを握んでいた。吹
矢筒である。

青年は、そちらへ、すずしいまなざしを向けると、
「女には、女らしい生きかたというものがあるぞ」
「な、なに言つてやがんだい！ ばけものめ——」

女は、喘ぐように、そのゆたかにふくらんだ胸をそ
らすと、いきなり、筒を、口にあてた。

青年は、にこ、と微笑した。

女は、ふっ、と筒中へ、息を吹きこめた。

ひゅっ！

吹矢は、宙を切つて、一直線に、青年を襲つた。

ところが——。

青年は、眉毛一本うごかさずに、左手をあげると、

飛び来たった吹矢を、むぞうさに掴みとつたのであ
る。あたかも、少年が、あげは蝶でもつかむように
——。

同時に、鬼十郎が、いきなり、無言で、きえーっ、
と空を唸らせて、切りあびせた白刃を、青年自身、蝶
と化したように、ひらりと、五体を躍らせて、たやす
く避けてみせたのであった。

「うぬがっ！ 妖怪変化かっ！」

鬼十郎は、必殺の一閃を、むなしく宙に舞わせて、
思わず、そう叫んだ。

「わたしは、人間だ」

青年の声音は、あくまで静かであった。

「名乗れっ——」

「姓は源氏、名は九郎——おぼえておいてくれとはた
のまぬ」

青年は、あかるく笑つて、ゆっくりと、もとの位置
にあゆみ出ると、

「どうやら、おぬしとは、このままでわかれられそう
もない。片をつけるか」

「な、なにを——」